

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 20 日現在

機関番号：25501

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20330073

研究課題名(和文) 寛永通寶の生産と流通——東アジア銭貨の共時性を視座に——

研究課題名(英文) The production and circulation of *Kan'ei Tsuhō*—Considering the interconnectedness of coinage activity in East Asia—

研究代表者

櫻木 晋一 (SAKURAKI SHINICHI)

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：00259681

研究分野：経済学

科研費の分科・細目：経済史

キーワード：寛永通寶・貨幣考古学・出土銭貨・海域アジア・金属組成・データベース・復元実験

1. 研究計画の概要

①考古資料や文献史料などの諸史料を駆使して、寛永通寶を代表とする近世銭貨の生産と流通の実態を解明する。

②金属組成分析など自然科学からのアプローチにより、銭貨の特徴把握や鑄造技術の解明を図る。

③中国・朝鮮・ベトナムの銭貨流通について、出土銭貨の分析からその状況を把握し、共時性について検討する。

④国家間交易による銭貨および金属原材料の動態を、海域アジアという広域経済圏の中で位置づけて考察をおこなう。

⑤出土銭貨データベースなど研究成果をホームページ上で公開するとともに、グローバルネットワークの構築によって情報の共有を目指す。また、各種学会で研究成果を公表する。

2. 研究の進捗状況

①考古資料班は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵されている博多遺跡群の個別出土銭について悉皆調査を継続している。また、宮崎県総合博物館所蔵一括出土銭の分類・整理作業や山口市教育委員会所蔵出土寛永通寶のデータベース作成など、海外も含め各地の博物館や教育委員会等が所蔵している銭貨について、実見調査や報告書からの資料検索作業などを精力的におこなっている。関西・関東という大枠で考えると、寛永通寶の生産地と流通地には相関がうかがわれる。

文献史料班は、日本銀行や住友史料館所蔵史料の再検討、伊勢地域の史料博搜などをおこなっている。また、若手の研究協力者を追加し、近世初期小倉藩の鑄銭事業や秋田藩の

廻銭実態など、これまで未解明の点について成果をあげている。

②文化財科学班は、各地の教育委員会が所蔵している寛永通寶などの出土銭貨で、分析が許されたものについて ICP-AES 法分析や蛍光 X 線分析をおこない、金属組成分析値のデータ蓄積をおこなっている。新たな知見として、近世初期の日本銭貨については、砒素銅が使用されていることを突き止めた。鑄造技術を解明するために、小規模な銭貨の復元実験を開始し、溶けた金属の鑄廻り具合などについて確認をしている。

③海外調査班は、ハノイにおけるベトナム一括出土銭の調査によって、14 世紀から 16 世紀にかけてのハノイ近郊では、中国銭が流通銭貨の主体であったことを明らかにした。ベトナムで寛永通寶や長崎貿易銭を確認できたことから、日越交流が明らかとなった。また、コピー銭主体の一括出土銭が存在することから、流通銭貨の重層性や共時性を明らかにするなど、多大な成果をあげている。

④交易班は、東インド会社を中心とした交易に関する研究報告を、オランダで開催された世界経済史学会で報告するなど、精力的に学会発表や論文の公表をおこなっている。

⑤データサイエンス班は、グローバルネットワークの構築、金属組成分析値の解析、ホームページの作成・管理等をおこなっている。出土銭貨データベースの一部は下関市立大学のホームページ上で公開している。国際学会については、フランス人研究者フランソワ・ティエリー氏を招聘し 1 年前倒しで実施した。また、イタリアでの EAJS(European Association for Japanese Studies)、オランダでの WEHC(World Economic History

Congress)、イギリスでの INC(International Numismatic Congress)で英語による報告をおこなった。メンバー全員による研究集会は毎年開催しており(北九州市・沖縄県・神戸市・下関市)、進行中の研究概要を報告することによって、研究領域の異なるメンバー間で問題意識を共有しあっている。また研究成果を、日本考古学協会、社会経済史学会、日本化学会、三田史学会、出土銭貨研究会などの学会で報告した。大英博物館所蔵日本貨幣カタログが出版された。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

金属組成の分析に留まらず、当初の計画にはなかった銭貨の復元実験に着手できたことは大きな前進であると考えている。韓国での出土銭貨実見調査に着手できていない点は、最終年に必ず取り組まなければならない。

4. 今後の研究の推進方策

①藩札などコイン以外の貨幣についても実見調査を開始したので、継続的に実施していく。

②海外に散逸している重要な日本貨幣についての情報を集める。フランス国立図書所蔵日本貨幣については、今夏に実見調査をおこない、データベースを作成することとしている。

③復元実験で鑄造した銭貨の金属組成分析をおこなう。可能であれば、寛永通寶本来の大きさ(100枚程度)の枝銭を復元鑄造し、鑄造技術の問題点を明らかにしていく。

④最終の研究集会を東洋大学で開催することにしており、各班それぞれが成果をまとめる。出版社と交渉し、成果物を書籍として刊行できるように努力する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 24 件)

島田竜登「近世アジアの交易世界—オランダ東インド会社文書からの接近—」『歴史と地理』634,2010,pp.1-14.

Shin'ichi Sakuraki, “New Developments in Japanese Numismatic History”, *A Survey of Numismatic Research 2002-2007*, 2009, pp.578-581.

三宅俊彦「東アジアの銭貨流通」『東アジアの周縁世界』(同成社)2009,pp.158-171.

大内俊二・廣木由美子「一括出土銭の法量の統計学的考察」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』Vol.12,2009,pp.193-204.

櫻木晋一・大内俊二「フィッツウィリアム博物館所蔵ベトナム貨幣について」『出土銭貨』第28号,2008,pp.46-56.

〔学会発表〕(計 29 件)

櫻木晋一「ハノイにおける一括出土銭調査—6 個の資料から見たベトナム銭貨生産と流通—」社会経済史学会九州部会, 2010. 11. 6. 下関市立大学

Shin'ichi Sakuraki, “An Archaeological Perspective on Pre-modern Japanese Coinage” & Keiichiro Kato, “Paper Money in Early-modern Japan” XIV International Numismatic Congress, 3 September 2009, Glasgow

Ryuto Shimada, “South-East Asian Tin Production and its Export Trade in the Eighteenth Century・Invisible Links: Maritime Trade between Japan and India in the Early Modern Period” XVth World Economic History Congress, 3 and 4 August 2009, Utrecht University, The Netherlands

Shin'ichi Sakuraki, “What Coin Finds Tell Us about Currency and the Use of Money in the Edo Period” & Keiichiro Kato, “Money and Travel in Premodern Japan” European Association for Japanese Studies, 2008. 9. 23. Lecce

島田竜登「環シナ海と銭貨—近世東・東南アジア通商圏における小額貨幣—」出土銭貨研究会第15回研究大会, 2008. 11. 1. 沖縄県立博物館

〔図書〕(計 3 件)

Shin'ichi Sakuraki, British Museum, “A Catalogue of the Japanese Coin Collection (pre-Meiji) at the British Museum” 2010, pp.17-25,49-50,65-218.

谷川章雄・櫻木晋一・小林義孝, 高志書院『六道銭の考古学』2009, pp.1-5,41-50.

櫻木晋一, 慶應義塾大学出版会『貨幣考古学序説』2009,314p

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕